

July 20, 2009：蓼科高原。国道 299 号を下る途上、朝に立ち寄った草むらに咲くシヨウマの一種の白い花にヒョウモンチョウの類が訪れているのが目に入り、朝と同じ場所に車をとめてもらう。近づいてよくみると、やや羽の痛んだミドリヒョウモンが夢中で蜜を吸っている。裏面の緑色鱗粉が時おり陽光に映えてきらりと輝いてとてもきれいだ。ミドリヒョウモンという命名に納得がいく瞬間である。



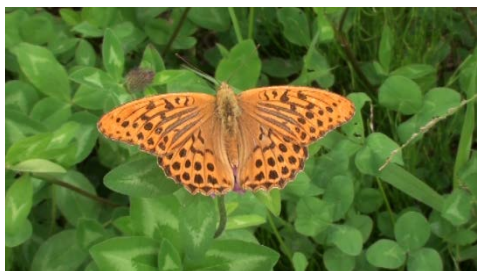
July 23, 2009：入笠山。富士見側から入笠山登山道をのぼるあいだ天候の回復を期待するけれども、中腹で射し込んできた陽光も長続きせず、昨年クジャクチョウなどを楽しめた目的地あたりではすっかり霧が濃くなってしまふ。途中、なぜこんなところかと思う道路際にひとりたたずむ



高校生の姿をみる。さらに進んだ先の天気がよければ眺望がきくシシウドが多い位置に再び若者がひとり陣取っている。そこから 50m ほど下ったところに車をとめられるちよほどの広場があり、ネットとビデオカメラをもって降りてみる。若者のところまで行って声をかけると、東京からきた高校 1 年生で、野外にでてから現地で自分自身が研究テーマを決める SSH(Super Science High-school)指定校生徒による活動だという。彼はここに来て「シシウドを訪れる昆虫

たち」を 研究テーマとして、昨日から 15 分ごとに、これと決めたシシウドをみてまわって訪花昆虫類を観察記録しているらしく、ノートと捕獲したカミキリムシを見せてくれる。ニフハナカミキリなど普通種が多いが、彼自身は昆虫の名前はあとで調べないとわからないとのこと。途中みかけた高校生も、この子と同様、独自の研究テーマに取り組んでいたのだろうと納得。車をとめた広場にもどると、アザミの花でミドリヒョウモンの♀やギンボシヒョウモン、イチモンジセセリが蜜を吸っており、その様子をビデオで追う。

ミドリヒョウモンは日本産ヒョウモン属のなかではごく普通種であるが、加古川市権現ダム周



回道路で、路傍側溝の苔むしたコンクリート壁面に直接産卵する現場を観察したことがある。ツマグロヒョウモンも食草のスミレ類がある周辺の枯れ草などに産

卵するのを見るが、このミドリヒョウモンが産卵した近くにはこれといったスミレ類はみあたらず、孵化した幼虫は大変な目にあうな、と同情したものである。2007 年発刊の「兵庫県の蝶：広畑政巳、近藤伸一共著」によれば本種の食草としてタチツボスミレだけが確認できているとのことで、兵庫県ではその他のほとんどのヒョウモン類の食草がスミレ類のいかなる種であるのかが確認できていないという。 昨年秋、ウラギンスジヒョウモンの発生現地で、白い花をつけたスミレの群落をみつけたが、もしかしたらウラギンスジヒョウモンの食草として利用されている可能性が高く、筆者の研究者魂がむくむくと沸き起こってきている。そのためにはスミレの現物をみてすぐに名前がいいあてられるよう、植物図鑑の勉強から始めなくてはならない。